

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

要覧 1990



目 次

概 要

歴史と性格 1
組 織 2
職 員 4
研究部門構成 6

研究活動

共同研究プロジェクト 7
海外学術調査 14
助手等の現地投入 16
共同研究員(公募) 17
研究生 17
言語情報機械処理 18
言語研修 19
外国人研究員 20

施 設

電算機室 23
図書室 24
音声学実験室 25
出版物一覧 26

—表紙写真説明—

パキスタンのバルーチスターンの州都クウェッタには、アフガニスタンより移住して来たハザーラの人びとが住みついている。同国では少数派のシーア・イスラム教徒で、ペルシア語の方言形がその母語である。私は機会あるごとに、彼らの宗教行事に参加してきた。あるとき、「あんたはシーア派か、日本ではタキーヤをしてるんだらうね」と言われた。タキーヤとは、身に危険の及ぶときは自分の真の信仰を偽ってもよい、とするシーア派の教義である。タキーヤという語が今もその意味で用いられているのを、日常会話の中で聞いた最初の体験であった。もちろん、この子供たちには関係のないことである。彼らにとって私は、服喪儀礼のたびに姿を見せる、自分たちと同じ言葉を話す、カメラをさげた奇妙な外人である。 (上岡 弘二)

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

* * *

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では17部門の研究所に成長しました。

組 織



(1990年4月1日現在)

区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(3) 16	16	0	8	28	(3) 68
現員	(3) 14	15	0	9	28	(3) 66

() は外国人客員数を外数で示す

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第13期(1989.2~1991.1)の運営委員は現在以下の通りです。

池田 修	大阪外国語大学教授	谷 泰	京都大学人文科学研究所所長
石井 溥	所員	田町 常夫	福岡工業大学教授 (九州大学名誉教授)
石井 米雄	上智大学 アジア文化 研究所教授 (京都大学名誉教授)	中根 千枝	東京大学名誉教授
石川 榮吉	中京大学教授	中村 平次	所員
伊谷 純一郎	神戸学院大学 教授 (京都大学名誉教授)	西田 龍雄	京都大学教授
大河内 康憲	大阪外国語大学教授	本田 實信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
上岡 弘二	所員	三根谷 徹	東京大学名誉教授
神田 信夫	明治大学教授	護 雅夫	日本大学教授 (東京大学名誉教授)
北村 甫	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	矢内原 勝	慶応義塾大学教授
興水 優	東京外国語大学教授	山崎 利男	帝京大学教授 (東京大学名誉教授)
佐々木 高明	国立民族学博物館教授	渡部 忠世	放送大学教授 (京都大学名誉教授)
鈴木 斌	東京外国語大学教授		
祖父江 孝男	放送大学教授		

合同構想委員会

本委員会は、所長、運営委員会委員5名および教授会構成員4名で組織され、教授会・運営委員会から研究所運営の基本方針に関する重要事項について審議を付託されたときに協議を行います。現在の委員は以下の通りです。

山口昌男(所長)、石川榮吉、神田信夫、谷 泰、西田龍雄、本田實信、池端雪浦(所員)、石井 溥、上岡弘二、中村平次

専門委員会

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1990年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

池上二良(札幌大学教授、北海道大学名誉教授)、池田修、大河内康憲、大東百合子(明海大学副学長)、小澤重男(東京外国語大学名誉教授)、北村甫、興水優、柴田紀男(天理大学教授)、鈴木斌、西田龍雄

職 員

所長（併任） 山 口 昌 男

教 授

池 端 雪 浦：フィリピン史における政治と宗教
梅 田 博 之：朝鮮語
大 江 孝 男：朝鮮語
岡 田 英 弘：東アジア史
上 岡 弘 二：イラン語、イスラムの民間信仰
川 田 順 造：アフリカ文化
坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語
永 田 雄 三：トルコ史
中 野 暁 雄：アフロ・アジア諸言語及びその民族誌
中 村 平 次：南アジア現代史
奈 良 毅：インド・アールリア諸語
日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究
家 島 彦 一：インド洋・地中海における中世交易港の比較研究
山 口 昌 男：文化記号論

助 教 授

石 井 溥：南アジアの人類学
加 賀 谷 良 平：音響音声学、アフリカ諸言語
梶 茂 樹：バンツール諸語、言語人類学
新 谷 忠 彦：言語哲学
内 藤 雅 雄：インド近・現代史
中 嶋 幹 起：漢語
中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史
羽 田 亨 一：サファヒー朝文化史研究
林 徹：トルコ語
松 下 周 二：アフリカの言語
松 村 一 登：フィン・ウゴル諸語
水 島 司：南インド近・現代史
宮 崎 恒 二：オーストロネシア諸社会の研究
森 幹 男：インドシナ比較文化史
守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究
およびス・ス辞典編纂

助 手

栗 原 浩 英：ヴェトナム現代史
栗 本 英 世：東・北東アフリカの人類学
黒 木 英 充：東アラブ近・現代史
高 知 尾 仁：世界表象と象徴性
中 澤 新 一：チベット仏教の人類学的研究
西 尾 哲 夫：アラビア語・アラブ文化
根 本 敬：ビルマ近・現代史
三 尾 裕 子：東アジアの人類学
峰 岸 真 琴：オーストロアジア諸言語



ハザーラ族の子供。彼らはジンギス汗の末裔であることを誇りとし自分たちをハザーラ・モゴル(Hazāra-Moghol)と称している。(上岡 弘二)

事務長 山本唯雄
 文部事務官
 事務長補佐 鈴木邦叔
 文部事務官

庶務係

係長 福井光雄
 文部事務官
 主任 神田環
 文部事務官
 文部事務官 谷川かつ子
 文部事務官 元井洋一
 文部技官 埴和雄
 (自動車運転手)

会計係

係長 山本芳久
 文部事務官
 文部事務官 田中鉄哉
 文部事務官 藤崎英朗
 文部事務官 佐伯季之
 用務員 植田カツエ

研修・情報処理係

係長 平井榮治
 文部事務官
 文部事務官 中嶋弘子
 文部事務官 山口登之
 文部技官 今井健二

渉外係

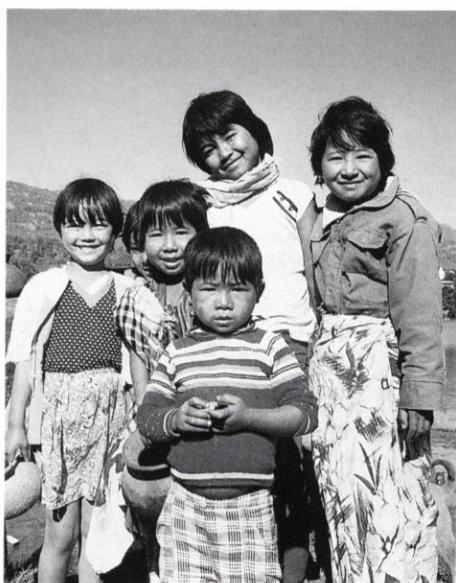
係長 佐久間敬喜
 文部事務官
 主任 岡田ほなみ
 文部事務官
 文部事務官 堀浩

共同利用係

係長 浅見義則
 文部事務官
 文部事務官 金井京子
 文部事務官 津田貞子
 文部事務官 伊藤宜司

図書係

係長 隅田浩
 文部事務官
 主任 中川陽子
 文部事務官
 文部事務官 鈴木喜久子
 文部事務官 須郷知子
 文部事務官 斉藤眞一郎



ビルマ北東部シャン州にある小さな町ピンダヤの子供たち。美しい湖を囲むようにしてできたこのピンダヤは、かつてソープワと呼ばれる藩王のいた歴史の古い町である。ピンダヤの人々は水を井戸の他、この湖に頼っている。この子たちも、家の手伝いの一環として、毎朝ここに水を汲みに来る。ピンダヤに住む人々はほとんどがダヌ民族で、日常会話もなまりのあるビルマ語の他、ダヌ語が用いられる。ピンダヤはバガンと並ぶビルマで最も仏教の雰囲気が漂う町で、湖の北西部にある大きな洞窟の中には何千もの仏像が安置されている。ビルマの旅に慣れた外国人観光客が好んで訪れるところでもある。(根本 敬)

研究部門構成

研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化、民族学、歴史学、地理学等の分野における、特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東 北 ア ジ ア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
中 国 第 Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
中 国 第 Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(ロロ語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モングオル語・ダグール語・モゴール語および文化
トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァッシュ語・ヤクート語など)、ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエド諸語など)および文化
インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
インドネシア・ オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ビサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・グジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・パーリ語などおよび文化
インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラーヤラム語)・ムンダ諸語および文化
イ ラ ン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチー語・バシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
ア ラ ビ ア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグリブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ第Ⅰ (1964年度)	スワヒリ語、キクユ語、ガンダ語、ルワンダ語、スクマ語、ベンバ語、ショナ語、ズル語、コサ語、ウンブドゥ語、コイサン語、ソマリ語、ガラ語、ディンカ語などおよび文化
アフリカ第Ⅱ (1987年度)	ハウサ語、フラニ語、ウォロフ語、バンバラ語、メンデ語、アカン語、ヨルバ語、イボ語、カヌリ語、サンゴ語、ファン語、リンガラ語、コンゴ語、モンゴ語などおよび文化

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1990年度のプロジェクトの研究計画と共同研究員は以下の通りです。

なお()内は研究代表者です。

言語研修 (大江孝男) 所員 23名

本年度に予定する事業及び研究活動は次の通り。

1. 研修講座：実施対象言語—東京会場：朝鮮語，インドネシア語；大阪会場：ペルシア語。
2. 専門委員会2回（2年5月，3年3月），研修実施に関する成果報告・検討のための専門委員・共同研究員合同会議1回（2年10月）
3. 研修教材作成と研究連絡のための研究会：東京・大阪各2回（計4回）
4. 自動化研修のための電算機補助プログラム開発班の研究会：東京3回（2年6月，9月，12月）

上記の計画によって、前年度に引き続き本研究所の言語研修に関する諸問題を検討するとともに、日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し、教材と方法などの改善に役立てる。検討すべき課題は、①研修のあり方，②実施言語の選定と計画の検討，③実施方法（カリキュラム，テキストの構成，指導・訓練の方法，効果の測定，評価の方法，など），④自動化研修の実現と利用に関する研究（自動化可能な範囲，実施可能な事業，プログラムの開発，必要な施設の検討，など）。

大坪一夫	門脇誠一	舟田京子	岡崎正孝
高田美佐子	金 祐鴻	井本英一	奥西峻介
吉川武時	佐々木重次	勝藤 猛	藤元優子

辞典編纂プロジェクト (梅田博之) 所員 7名

アジア・アフリカの諸言語の言語資料を蒐集，機械処理し，それに音韻論的，辞学的，形態論的，統辞論的分析を施し，これらの言語の辞典の編纂にそなえる。

北村 甫	讃井唯允	辻 伸久	宮脇淳子
慶谷壽信	武内紹人		

アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也) 所員 9名

本研究は、現代アフリカにおいて進行する最も大きな社会変化である都市化と地域形成の問題を、国民社会の形成、都市社会の構造、都市・村落関係の展開、地域共通文化の機能、リングアフランカの機能などとの関連において長期の、継続的比較調査をおこない、その資料にもとづいて動態的に解明しようとするものである。

今年度は、科研による現地調査(第二期第二次)をおこなう。

赤坂 賢	門村 浩	富川盛道	松田素二
阿久津昌三	菊地滋夫	富永智津子	宮治美江子
上田 将	小馬 徹	中村孚美	米山俊直
江口一久	坂本邦彦	端 信行	和崎春日
大森元吉	嶋田義仁	原口武彦	和崎洋一
小川 了	店田廣文	福井勝義	渡部重行
小倉充夫	戸田真紀子	前山 隆	和田正平

南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成 (奈良 毅) 所員 3名

本年度(平成2年度)は、一昨年度に入力したデータベース(ベンガル語、ヒンディー語、パンジャブ語、カンナダ語、タミル語、サンタル語、カスィ語、ルシャイ語)と昨年度に入力したデータベース(オリヤー語、カシミール語、マラーティー語、テルグ語、ムンダリー語、メイティ/マニプーリー語)等の言語分析を行う。

研究連絡会を年に2回(平成2年6月と平成3年2月)開く。

研究発表論文をまとめた年報その2(A Computer-assisted study of South-Asian Languages)1冊と各言語の基本語彙集シリーズ(Basic Vocabulary of South-Asian Languages)を2冊刊行する。

内田紀彦	長 弘毅	藤井 毅	溝上富夫
坂田貞二	林 典門	町田和彦	藪 司郎

サロジ・K・チャウドリ



19世紀はじめにザンジバルにイスラムの王国をつくったブサイド王朝の歴代の王様のお墓は、ザンジバルの旧王宮のかたわらの、海岸に面した通りのかげにひっそりとならんでいる。正面の石堀でかこまれたところは、始祖のサイドサイドの墓で、あとは、歴代の王や、その夫人、傍系の男たち、若くして死んだむすめたちなどのものである。女たちの墓は、色うつくしい花模様やモザイク模様のタイルがはめこまれ、苦むした墓標はよめなくても、死者にたいする哀惜の気持ちがよみとれる。1964年の革命以来、数年前まで、この墓はあれるにまかせられ、だれでも自由に出入りできたのだが、オマーンとの関係が修復にむかっているこのころは、まわりに堀がめぐらされ、入口には、鉄のとびらがつけられて、容易に人をよせつけなくなった。

(日野舜也)

イスラム圏における異文化接触のメカニズム (家島彦一) 所員 7名

イスラム圏はその歴史的展開と地理的拡大の諸過程において、さまざまな社会・文化・生態との接触・共存と融合を達成し、相互の矛盾・衝突をはらみつつ、同時に一つの共通文化圏としての世界を形成した。本プロジェクトは、そうした多重・異質と統一・均質の二元的性格をもったイスラム圏の社会・文化にみられる接触のメカニズムを総合的に促えることを目的としている。その目的にもとづいて、具体的研究テーマを「市(sūq/bāzār)の比較研究」と設定した。イスラム圏における市の果たす社会経済的、文化的機能、中立地としての場の構造、ネットワークを通じての他世界との接触について、その歴史的展開と現代における変容過程、イスラム圏外の市との比較研究、地理学、社会学、農業経済や都市問題の立場など、多分野からの学際的研究を深めたいと考えている。

本年度は第4年度目をむかえるが、昨年度に引き続き、年2～3回の研究会を予定している。昨年度から海外学術調査「イスラム圏における市の比較研究」が始まったので、その調査結果を研究会で討議し、研究を深めていきたいと考えている。

赤坂 賢	私市正年	薮 勇造	松木栄三
麻田 豊	後藤 明	関本照夫	三浦 徹
石原 潤	斉藤寛海	柘植洋一	三木 亘
太田敬子	斉藤美津子	奴田原睦明	宮治美江子
加藤 博	坂本 勉	信岡奈生	森川孝典
川瀬豊子	佐藤次高	原 隆一	山形孝夫
川床睦夫	真田 安	深澤克己	

インド・アリアーチベット・ビルマ系文化の接触・変容の研究 (石井 溥) 所員 3名

ヒマラヤ周辺地域の諸住民を主対象とし、

- 1) インド・アリア系言語・文化を基層としてもつ人々の文化・社会が、チベット・ビルマ系言語・文化と接触することで、どのような影響・変容をこうむってきたか。
- 2) チベット・ビルマ系言語を母語とする様々な民族が、インド・アリア系言語・文化、およびチベット系文化をどのように吸収、消化し、民俗文化と融合させてきたか、以上の両面を文化、社会、言語等の面から研究する。

当面は1年に1～2回研究会を開き、その後、海外調査を計画する。

出版物はMonumenta Serindica, YAKのシリーズの刊行を続ける。

生明慶二	鹿野勝彦	長野泰彦	南真木人
飯島 茂	北村 甫	西 義郎	山本真弓
糸永正之	島 岩	藤井知昭	山本勇次
永ノ尾信悟	諏訪哲郎	星実千代	結城史隆
奥山直司	立川武蔵	三瓶清朝	

象徴と世界観の比較研究 (宮崎恒二) 所員 4名

アジア・アフリカおよびアメリカにおける説話、神話、儀礼、身体活動などを、特に空間、時間の観念との関連においてとらえ、この領域における比較研究ならびに諸学問分野間の方法論的接合点を探る。

青木 保	小松和彦	中村敏雄	宮坂敬造
稲垣正浩	小山修三	中村雄二郎	山下晋司
内堀基光	寒川恒夫	西村 康	山本徳郎
小川 了	清水昭俊	野村雅一	横井 清
落合一泰	清水 論	舛本直文	リー・トプソン
蔵持不三也	杉島敬志	松浪健四郎	渡辺公三
小谷寛二	関 一敏		

アジア・アフリカ諸言語の比較・対照研究 (奈良 毅) 所員 16名

アジア・アフリカ諸言語の文法ならびに音韻構造を、同系統の他言語との比較あるいは他系統の言語との対照によって明らかにするため、文法部会、音韻部会をそれぞれ会合を開いて研究発表・討議を行う。

刊行物としては、共同研究プロジェクト報告(通称年報)1冊と文法便覧2冊の予定。

伊豆山敦子	柴田紀男	中井幸比古	益子幸江
岩田 礼	柴谷方良	中島 久	溝上富夫
内田紀彦	杉田 洋	縄田鉄男	宮岡伯人
上野善道	杉藤美代子	新田哲夫	村崎恭子
大島 稔	副島昭夫	橋本 勝	森口恒一
小田真弘	高階美行	早田輝洋	藪 司郎
切替英雄	田村すず子	原 誠	山田幸宏
金 東俊	辻 伸久	福井 玲	湯川恭敏
近藤達夫	土田 滋	福田権一	吉川 守
坂本比奈子	角田太作	福原信義	ツィオン・ベン・シムエル
崎山 理	富田健次		

「未開」概念の再検討 (川田順造) 所員 6名

「未開」の概念は、欧米諸国で民族学をはじめとして19世紀頃から広く使用されるようになり、現在まで、文化人類学など文化・社会科学諸分野で用いられてきたが、この概念の成立課程、含意するものの文化的背景、研究上の概念としての有効性等については、十分な検討がなされていなかった。この研究計画では、文化人類学、民族学、民俗学、歴史学、哲学、国文学、人文地理学、音楽学、美術史、建築史、科学史、思想史等々関連諸分野の第一線研究者の参加を得て、学術的な場でこの問題を検討する。それによって近代西洋で形成された概念を相対化すると共にそれを基とした日本人研究者の視点も対象化することを企図している。平成元年度まで通算9回の研究会を行い、「未開」概念形成の歴史的背景、「異界」としての「未開」世界、先史学・民族学・民俗学・歴史学からみた「未開」概念、進歩の概念と「未開」概念、「未開」と「開発」等について検討した。成果は討論も含め、リポートから『「未開」概念の再検討』Iとして平成元年に第1巻が刊行されたが、以下続刊の予定。

阿部謹也	樺山紘一	田村克己	保坂実千代
阿部年晴	小西正捷	田村善次郎	堀内 勝
網野善彦	小松和彦	塚田健一	松園萬亀雄
綾部恒雄	坂井信三	塚本 学	松田素二
安溪遊地	坂部 恵	柘植元一	宮廻和男
伊藤亜人	桜井由躬雄	徳丸吉彦	宮田 登
伊東俊太郎	陣内秀信	二宮宏之	安丸良夫
上田 篤	住谷一彦	野村純一	山下晋司
内堀基光	関本照夫	野村雅一	山本吉左右
応地利明	竹沢尚一郎	船曳建夫	渡辺公三
大貫良夫	田中雅一	古橋信孝	若桑みどり
金子春美	谷 泰		

南アジアにおける社会集団形成過程に関する研究 (内藤雅雄) 所員 4名

南アジアの社会では歴史的にもまた今日においても、多様な言語・民族・宗教やそしてカーストの問題が複雑にからまり合い、そこでの社会現象の理解を困難にしている。本研究は、南アジア諸国の近・現代史を通じて、諸々の形態の社会現象ことに社会的、政治的運動が展開されるに当たって、人々がいかなる契機や結合原理を通してそれに参加していったかを検討し、様々な社会変動に関与した諸組織・集団の実体をより精密に把握しようとするものである。地域的には旧植民地インド(従って今日のインド・パキスタン・バングラデシュ)とスリランカに加えて、これらの地域から多数の海外移民が出ていったイギリス連邦諸国(連合王国を含む)をカバーするものとする。

石田英明	河合明宣	鈴木正崇	柳沢 悠
岡寄佐代子	佐藤 宏	長谷安朗	サンタジラン・カデルガマル
辛島 昇	渋谷利雄	藤井 毅	

西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究 (永田雄三) 所員 6名

- (1) 西アジアの歴史・地理・言語・政治・経済に関する資料(碑文・年代記・地図・地理書・伝記集・写本カタログ・統計資料・考古学的・社会人類学的調査報告等)のうち、データベース化に適した基礎資料の選定。
- (2) 選定された基礎資料のデータベース化の形態の決定。
- (3) (2)において形態の決定された基礎資料を将来データベース化する。

岡崎正孝	北川誠一	鈴木 董	間野英二
岡田恵美子	佐藤次高	関根謙司	湯川 武
小野 浩	清水宏祐	内藤正典	

アジア遊牧民の歴史と言語 (岡田英弘) 所員 3名

アジアの全体史像を構築するに当って問題となる諸要素の一つは、内陸地域に広く散在する遊牧民の史的役割である。しかしその解明は史料の制約と用語・概念の未発達のために遅れた段階にある。この研究プロジェクトでは、満洲、モンゴル、トルコ、チベット、ペルシア、アラビア等の地域の歴史と言語の専門家の協力のもとにできる限り一貫した叙述の可能性を探求することを目的とし、年2回の研究会を開催する。

河内良弘	小山皓一郎	濱田正美	宮脇淳子
北川誠一	佐口 透	樋口康一	森川哲雄
窪田新一	清水宏祐	松村 潤	山口瑞鳳
栗林 均	志茂碩敏	間野英二	吉田順一
後藤 明	庄垣内正弘		

東南アジアの政治と文化 (池端雪浦) 所員 4名

近現代の東南アジアの政治において、文化の問題はきわめて重要であり、またその問題領域は多岐にわたっている。本プロジェクトでは諸民族、諸文化間の比較を重視しつつ、つぎのような課題をめぐって研究を進めたい。(1)政治権力の正統性、(2)民族社会のアイデンティティをめぐる文化政策、(3)国民統合ならびに開発と文化的少数民族問題、(4)政治運動と宗教のかかわり、(5)外来政治思想の土着化、(6)社会統合のプロセスにおける大衆文化の役割、(7)制度、組織、法の規範と運用の二重性。最終年度の本年度は、全体をとりまとめ、報告書を出版したい。

赤木 攻	北原 淳	土屋健治	早瀬晋三
伊東利勝	白石昌也	富沢寿勇	弘末雅士
押川典昭	関本照夫	中野 聡	吉川洋子
川島 緑	高谷紀夫		

多民族国家における異化・同化形態の比較研究 (水島 司) 所員 3名

本プロジェクトは、多民族国家における異化・同化の形態を、地域的・学際的に比較研究するものである。共同研究では、研究員それぞれの専門領域を基礎に、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自身の変容形態と、そこで新たに生成されてくる文化形態を明らかにし、同時に、異化・同化の諸過程に着目することによって、各文化の特性を抽出するようにつとめる。それらの作業を通じて、異文化接触の一般的理論を見いだすことが最終的課題である。当面、典型的な多民族国家であるマレーシアを対象として、年に2~3回の研究会をもち、課題や方法についての議論を深め、数年以内に予定している現地調査の結果も踏まえ、研究成果を逐次公刊していきたい。

穴沢 眞	黒田景子	津上 誠	野村 亨
小野沢純	桑原季雄	富沢寿勇	弘末雅士
加藤 剛	杉本 均	中澤政樹	藤本彰三
金子芳樹	瀬川昌久	西井涼子	山下晋司
川崎有三			

言語文化接触に関する研究 (中嶋幹起) 所員 5名

東アジア(中国大陸)に共生する幾多の諸民族の言語は多様に富み、その長い歴史と相俟って、多くの言語資料が集積されている。さらに、中国の開放政策により、近年は学術成果も公にされつつある。本プロジェクトでは、満洲語、モンゴル語、漢語、ウイグル語、チベット語、雲南の白語など、現地での研究体験もある、これらの諸言語の研究者が報告、討論を行いつつ、基礎的な言語研究資料を逐次刊行する。

落合守和	高田時雄	星実千代	森安孝夫
栗林 均	辻 伸久	細谷良夫	山川英彦
黒田信一郎	津曲敏郎	前川捷三	横山廣子
慶谷壽信	樋口康一	村上嘉英	李 乃因
庄垣内正弘			

東アジアの社会変容と国際環境 (中見立夫) 所員 5名

近年における18~20世紀東アジア史研究の特色は、従来にくらべて大巾に文書史料の利用が可能となったことである。これら文書資料の状況を、体系的に把握して研究へ結びつけていくことがなよりの急務である。また関係諸国学界・研究者との交流も飛躍的に拡大するとともに、おたがいの研究の共通性と異質性もあきらかになってきた。本プロジェクトでは、18世紀より20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題点を、文書史料によりどこまであきらかにできるか検討する。

毎年度トピックを決め、ゲストを含めた研究会を開くとともに、研究叢刊、資料叢刊も刊行する予定である。

石井 明	岡 洋樹	佐藤公彦	原山 煌
伊藤秀一	尾形洋一	中村 義	藤井昇三
石橋崇雄	笠原十九司	西村成雄	毛里和子
井上裕正	加藤直人	萩原 守	森山茂徳
白井勝美	クリスチャン・ダニエルス	浜下武志	柳澤 明
江夏由樹	佐々木 揚		

国際関係論の基礎的研究 (中村平次) 所員 3名

国際関係(International relations)の理論的・体系的な追究を目指すものとして国際関係論(International Relations)が存在することは良く知られている。この分野が日本の社会科学の分野に導入されるのは第2次大戦後のことである。その射程内には第1世界から第3世界が設定されていることはいままでもない。ここでは、近年、様々な立場から出されている国際関係論の諸成果を検討し直すなかで、とくに現代史研究や地域研究の各分野との関連で、新たな国際関係論体系を構築することを意図している。そのために、小研究プロジェクトを発足させ、少なくとも3年後には共同研究報告を成果として出すことを念願している。

なお、メンバーとしては、「第3世界と日本」の共同研究員が若干名加わる形となり、将来は増員も考えられ、研究会は年2回を予定している。

木村英亮	桐山 昇	吉村慎太郎
------	------	-------

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された、文部省科学研究費補助金「国際学術研究」による海外学術調査は以下の通りです。なお()内は研究代表者です。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年(富川盛道), 1974年, 1976年(日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年(岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年(河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年(三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査
1975年(飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年, 1983年, 1985年(原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——
1980年, 1982年, 1984年(北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——
1981年, 1982年, 1984年(富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——
1982年, 1983年, 1985年(山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年(三木 亘), 1986年(上岡弘二)



インドのチベット僧(ヒマーチャル・ブラデシュ州, グラムサラ)。中国から亡命したチベット人が修行に励む。(三尾裕子)



バリの村祭り

想像していた以上の色どりの豊かさと、観光地に共通の俗化の波が、妙に居心地悪い思いを抱かせる。

(水島 司)

- (11) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年, 1987年 (湯川恭敏)
- (12) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究
1986年, 1988年, 1990年 (川田順造)
- (13) アフリカにおける都市化の総合比較調査
1986年, 1987年 (日野舜也)
- (14) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成
1987年, 1988年, 1989年 (奈良 毅)
- (15) アフリカにおける都市化の比較調査——とくに、地域形成・国民社会形成との係わりにおいて
1989年, 1990年 (日野舜也)
- (16) イスラム圏における市の比較研究——異文化接触のメカニズム——
1989年, 1990年 (上岡弘二)
- (17) バントゥ諸語と若干の隣接諸語の記述・比較研究
1989年 (湯川恭敏), 1990年 (加賀谷良平)
- (18) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容
——漢族文化と非漢族文化との相互関係——
1990年 (中嶋幹起)

なお、このほかに文部省科学研究費補助金(国際学術研究)を受けているものとして、「国際学術研究に関する総合調査研究」(通称「国際学術研究総括班」)があります。「総括班」は本研究所所長を研究代表者とし、他の様々な機関に所属する研究者によって組織され、科学研究費(国際学術研究)にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と文部省の間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。

助手等の現地投入



ジャワのチンタマニ山

高原の観光地は、熱帯を訪れる観光客が一息つける場所。味を想像するしかない果物を口にする楽しみもある。 (水島 司)

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計24名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア地区)、守野庸雄 (タンザニア地区)
- 1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア地区)、家島彦一 (アラブ連合地区)
- 1971年—1973年 内藤雅雄 (インド地区)、中野暁雄 (モロッコ地区)
- 1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア地区)、中嶋幹起 (香港地区)
- 1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ地区)、湯川恭敏 (タンザニア、ザイール地区)
- 1977年—1979年 石井 溥 (ネパール地区)、藪 司郎 (ビルマ地区)
- 1979年—1981年 羽田亨一 (イラン、トルコ地区)、清水宏祐 (アラブ連合、イラン、トルコ地区)
- 1981年—1983年 山本勇次 (ネパール地区)、新谷忠彦 (ニューカレドニア地区)
- 1983年—1985年 辻 伸久 (中国、香港地区)、水島 司 (インド地区)
- 1985年—1987年 中見立夫 (中国、モンゴル地区)、梶 茂樹 (ザイール、ケニア、ザンビア地区)
- 1987年—1989年 松村一登 (フィンランド、ソ連地区)、宮崎恒二 (オランダ、インドネシア地区)
- 1989年—1991年 林 徹 (中国、トルコ地区)、栗本英世 (エチオピア、ケニア地区)



福建省泉州の「惠安女」。惠安の人々は漢族と自称しているが、普段から独特の衣装を身につけている。写真は太い針金と黒い毛糸で被り物を作っているところ。

(三尾裕子)

共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクト（p.p. 7～14）とは別に、当研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究を行う共同研究員を公募しています。

応募資格：大学・研究機関の研究者、大学院生、またはこれに相当する者

募集期間：4月1日～5月31日

現在までに75名を委嘱し、うち、昨年度は次の方々に委嘱しています。

氏名	所属	研究テーマ	担当教官
石川克彦	アジア人口開発協会 嘱託研究員	モルトケの「トルコからの手紙」に見る、対トルコ近代国家像	永田雄三
小山田紀子	津田塾大学国際関係 研究所	19世紀アルジェリアにおける植民地行政町村の形成—トゥニエ・テル・ハアド市の事例を中心に	永田雄三
坂山高郎	中京大学文学部兼任 講師	近代オスマン史研究—1830年代「東方問題」とイギリス外交の展開	永田雄三
南 真木人	筑波大学大学院環境 科学研究科研究生	ヒマラヤ山地民族における生業変化の比較研究—マガールとグルンの稲作受容をめぐって—	石井 溥
花田康紀	新潟大学教養部講師	エヴェ語の研究	湯川恭敏
大石 周	大阪市立大学大学院	南インドの大河カーヴェーリ=コッリダム水系の灌漑事業に関して	水島 司
俣野敏子	信州大学農学部教授	パキスタンにおける灌漑方式と作物栽培—多様性とそれらの変容の経過—	中村平次

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

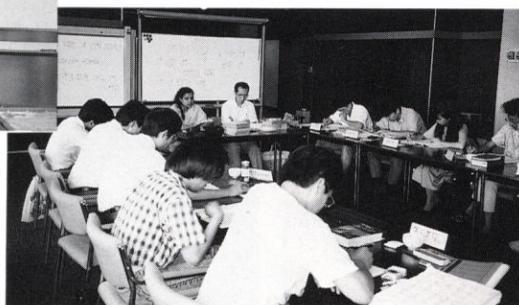
1990年度

氏名	研究テーマ	指導教官
張 志凡	日本の伝統、民俗芸能と中国演劇の関係、比較研究	山口昌男

言語研修



上：ベトナム語



右：ベンガル語

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおこなわれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からの7年間ほぼ毎年夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ1言語か2言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（2言語）と関西（1言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1974	朝鮮語 (10), チベット語 (12)	
1975	カンボジア語 (8), ベンガル語 (12)	
1976	ペルシア語 (10), スワヒリ語 (9)	ビルマ語 (5)
1977	広東語 (14), マラーティー語 (6)	モンゴル語 (18)
1978	タイ語 (12), トルコ語 (12)	ペルシア語 (13)
1979	ハウサ語 (8), ビルマ語 (14)	タイ語 (7)
1980	ネパール語 (14), モンゴル語 (14)	ベトナム語 (5)
1981	ヒンディー語 (8), パシュトー語 (10)	中国語中級 (26)
1982	アラビア語エジプト方言 (12), ハンガリー語 (17)	フルフルテ語 (12)
1983	チベット語 (12), フィンランド語 (21)	パンジャブ語 (8)
1984	ピリピノ語 (タガログ語) (12), ヨルバ語 (3)	トルコ語 (15)
1985	朝鮮語 (14), カンボジア語 (10)	スワヒリ語 (8)
1986	西南官話 (5), タミル語 (12)	ベンガル語 (8)
1987	中原官話 (10), タイ語 (19)	シンハラ語 (8)
1988	ペルシア語 (10), トルコ語 (16)	インドネシア語 (6)
1989	ベンガル語 (20), ベトナム語 (9)	アラビア語エジプト方言 (15)
1990	朝鮮語, インドネシア語	ペルシア語

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、全課程を終えた人には審査のうえ修了証書が授与されます。

各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。なお電算機補助による研修プログラム（CAI）の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。

外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

氏名	国名・専門	滞在期間
Gordon T. Bowles	アメリカ・人類学	1967. 10. 6~1968. 9. 15
Muhammad Ahmad Anis	エジプト・近代史	1968. 10. 2~12. 25
Ra'uf 'Abbās Hāmid	エジプト・近代史	1973. 4. 1~9. 19, 1987. 7. 11~9. 10, 1989. 10. 1~1990. 9. 30
Yellava Subbarayalu	インド・南インド中世史	1973. 10. 1~1975. 10. 31
Fe Aldave-Yap	フィリピン・フィリピン国語学	1975. 9. 20~12. 21
金完鎮	大韓民国・韓国語学	1975. 8. 20~1976. 7. 31
Curtis D. McFarland	アメリカ・言語学	1976. 2. 20~1977. 2. 19, 1979. 10. 1~1980. 9. 30
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān	エジプト・中東近代経済史, アラビア語学	1976. 6. 6~10. 4
Salim Abdulla Wazir	タンザニア・教育学	1976. 6. 4~10. 11
Bhakti Prasad Mallik	インド・言語学	1976. 7. 13~12. 20, 1985. 9. 30~1986. 9. 29
Karthigesu Indrapala	スリランカ・歴史学	1976. 11. 1~1977. 3. 31
俞昌均	大韓民国・韓国語学	1977. 4. 1~1978. 1. 31
Søren C. Egerod	デンマーク・東洋言語学, 古典学	1977. 9. 1~1978. 5. 31
Bozkurt Güvenç	トルコ・社会人類学	1978. 5. 17~10. 31, 1980. 10. 1~1981. 9. 30
Thubten Jigme Norbu	アメリカ・チベット学	1978. 6. 27~1979. 3. 31
André-Georges Haudricourt	フランス・言語学, 植物学, 民族学	1978. 10. 2~10. 31
Maria Lourdes S. Bautista	フィリピン・言語学	1978. 10. 23~1979. 5. 12
William S.-Y. Wang	アメリカ・言語学, 音声学, 神経言語学	1979. 2. 15~7. 14
Alhaji Faruk Gezawa	ナイジェリア・ハウサ語学	1979. 4. 12~12. 17
Shyamsunder Joshi	インド・ヒンディー文学	1979. 5. 26~8. 25
Dor Bahadur Bista	ネパール・社会人類学	1979. 5. 30~6. 20, 1983. 5. 27~1984. 5. 26
Jean-Baptiste Bunkungu	オートボルタ・モシ語学	1979. 6. 1~9. 26
Paul M. Thompson	アメリカ・中国哲学, 中国文学	1979. 9. 16~1980. 9. 15
Chandra Mudaliar	インド・国際関係論, 政治学	1979. 10. 1~1980. 9. 30
Udom Warotamasikkhadit	タイ・言語学	1979. 11. 6~11. 28



村長宅の出窓の品々。電気がこの村に来て約20年でも、シャワー用温水機は必ず薪か重油との併用装置がついている。ランプも骨董品にはまだなれない。

(1990年3月, 中野暁雄)



福州市連江県の水上居民。現在は政府の政策で陸上に住居を持ち定住化が進みつつある。それでも慣れ親しんだ船の上に暮らすのを好む人も多く、船の上には生活のにおいが満ちている。

(三尾裕子)

Thomas Sebeok	アメリカ・言語学, 記号学	1980. 4. 13~4. 27
傅 懋勛	中国・言語学, 記号学	1980. 6. 11~1981. 3. 10
Samuel H. Elbert	アメリカ・ポリネシア諸語	1980. 10. 1~1981. 1. 31
Kripal C. Yadav	インド・歴史学	1980. 10. 1~1981. 9. 30
Alain Peyraube	フランス・中国言語学	1980. 10. 11~12. 10
徐 在克	大韓民国・韓国語学	1981. 5. 25~1982. 3. 15
Muhammad B. Mkelle	タンザニア・スワヒリ語学	1981. 6. 19~12. 18
Maurice Coyaud	フランス・中国言語学	1981. 7. 1~7. 31
William O. Beeman	アメリカ・人類学	1981. 9. 1~1982. 8. 31
Marie-Claude Paris	フランス・中国言語学	1981. 9. 12~10. 12
Talat Tekin	トルコ・古代トルコ語	1981. 9. 14~1982. 1. 11
P. A. Narasimha Murthy	インド・政治学, 国際関係論	1981. 10. 1~1982. 9. 30
Yoshiro Imaeda	フランス・チベット学	1981. 10. 1~1982. 1. 16
Ernesto Constantino	フィリピン・フィリピン言語学	1981. 11. 1~1982. 10. 31
Suresh Awasthi	インド・民俗演劇	1982. 2. 1~1983. 1. 31
Sâlah A. al'Arabî	エジプト・アラビア語視聴覚教育学	1982. 2. 1~1983. 1. 31
Kiruja Ruchiami	ケニア・アフリカ事情	1982. 5. 1~5. 31
Mohammadou Aliou	カメルーン・フラ言語学	1982. 6. 1~9. 10
John G. Hangin	アメリカ・モンゴル言語学	1982. 9. 1~1983. 8. 31
Isidore Dyen	アメリカ・オーストロネシア比較言語学	1982. 8. 25~1983. 8. 24
Suriya Ratanakul	タイ・東南アジア諸言語, 言語学	1982. 8. 28~9. 11
Tuncer Baykara	トルコ・歴史学	1982. 10. 25~1983. 1. 24
Kanchana Ngourngsi	タイ・言語学	1982. 12. 10~12. 23
Elmar A. Hostenstein	スイス・普遍人類学	1983. 3. 1~1984. 2. 29
南 豊鉉	大韓民国・韓国語学	1983. 8. 11~1984. 8. 10
Alexis Rygaloff	フランス・中国言語学, 東アジア言語学	1983. 10. 1~1984. 9. 30
'Âdil 'Abd al-Salâm	シリア・自然地理学, チェルケス語	1983. 10. 21~1984. 10. 20
Sechin Jagchid	アメリカ・モンゴル史	1983. 9. 1~1984. 8. 31
Santasilan Kadirgamar	スリランカ・国際関係論	1983. 11. 1~1984. 8. 13

Lilia F. Antonio	フィリピン・フィリピン、フィリピン翻訳学	1984. 3. 15~1984. 9. 14, 1989. 6. 1~1990. 3. 31
Rajagopalan Venkataratnam	インド・医療社会学	1984. 6. 4~1985. 6. 3
Dattatreya N. Dhanagare	インド・社会学	1984. 9. 1~12. 31
朴 熙泰	大韓民国・日本語学	1984. 9. 1~1985. 8. 31
Ram Adhar Singh	インド・言語学	1984. 10. 1~1985. 9. 30
Barbara N. Aziz	アメリカ・社会人類学	1984. 10. 16~1985. 10. 15
Guillermo E. Quartucci	メキシコ・日本文学	1984. 11. 26~1985. 9. 27
黄 国営	中華人民共和国・言語学	1985. 2. 5~12. 4
Pradyumna P. Karan	アメリカ・人文地理学	1985. 10. 1~1986. 9. 30
馬 真	中華人民共和国・中国言語学	1985. 10. 1~1986. 9. 30
Metin And	トルコ・演劇学	1986. 3. 1~5. 31
韓 美卿	大韓民国・日本語学	1986. 4. 1~1987. 1. 31
Daw Mya Mya	ビルマ・歴史学	1985. 10. 1~1986. 5. 11
Shanmugam Pillai Subbiah	インド・農村地理学, 社会地理学	1986. 8. 21~1987. 4. 20
Ahmet Mete Tuncoku	トルコ・国際関係論	1986. 10. 1~1987. 9. 30
James Francis Downs	アメリカ・文化人類学	1986. 10. 1~1987. 9. 30
李 榮	中華人民共和国・中国音韻論, 方言学	1986. 12. 1~1987. 9. 30
賀 巍	中華人民共和国・中国語方言学	1987. 3. 1~8. 31
Kyaw Win	ビルマ・歴史学	1987. 6. 28~1988. 6. 27
Virgilio G. Enriquez	フィリピン・社会心理学, 言語心理学	1987. 10. 1~1988. 9. 30
Saroj K. Chaudhuri	インド・日本語, 日本文化	1987. 10. 1~1988. 9. 30
John H. Fincher	アメリカ・中国現代史	1987. 10. 1~1988. 9. 30
Urmila Phadnis	インド・国際関係論	1988. 5. 13~1989. 7. 21
特 布信	中華人民共和国・歴史学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
侯 精一	中華人民共和国・中国語方言学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
Nasrin F. Hakamri	イラン・社会学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
照那斯图	中華人民共和国・モンゴル言語学	1989. 10. 1~1990. 9. 30
任 洪彬	大韓民国・韓国語学	1989. 10. 1~1990. 9. 30
胡 坦	中華人民共和国・シナ・チベット言語学	1989. 11. 1~1990. 9. 30
王 鍾翰	中華人民共和国・歴史学	1989. 11. 15~12. 12
Frank M. Heidemann	西ドイツ・民族学, 社会学	1989. 11. 28~1990. 11. 27
成 百仁	大韓民国・満州語学	1990. 10. 1~1991. 9. 30
Mohammad-Reza Nasiri	イラン・歴史学	1990. 10. 1~1991. 9. 30
Luc Kwantén	アメリカ・中央アジアの歴史と言語	1990. 10. 16~1991. 9. 30
Jerry Norman	アメリカ・中国言語学	1991. 3. 1~1991. 8. 31

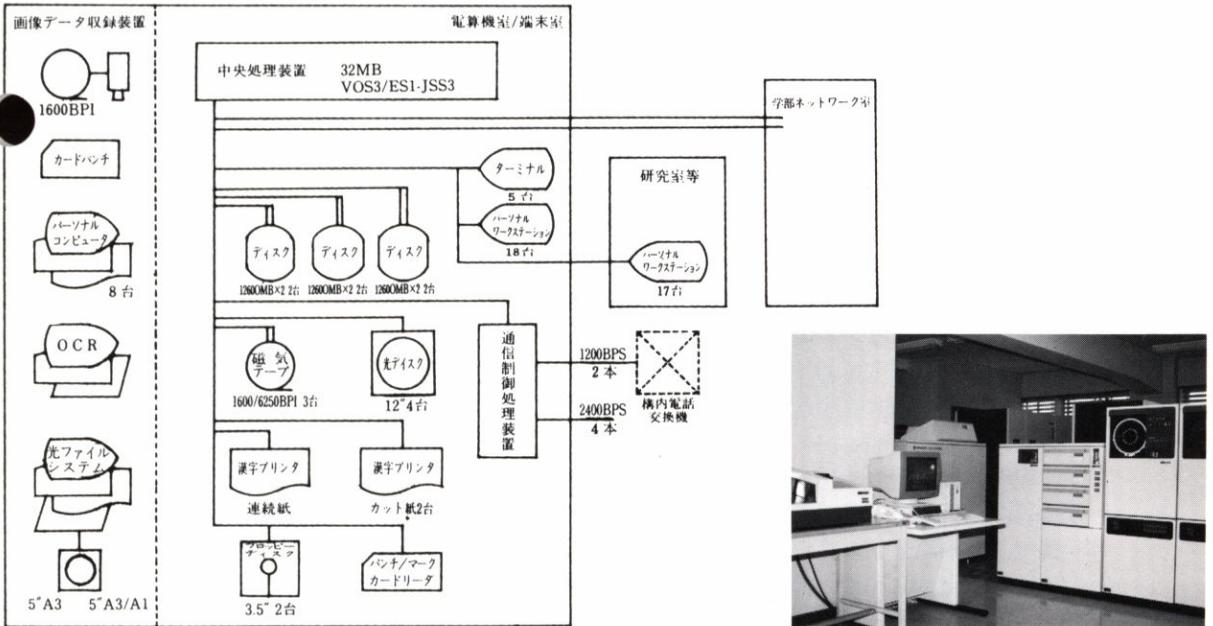


ザンジバルのまちに面した沖合い4キロにうかぶチャンゲ島は、別名ブリズンアイランドともよばれ、植民地時代は、反抗者や、政治犯をいれておく監獄になっていた。いまは、白い砂浜がある絶好の海水浴の場所として、観光客のとまれるちいさなホテルもたてられている。この島にいつごろからか、この巨大なリクガメが何十匹も飼われていて、子供たちがのっかるといかにもいやいやといった風情で、何歩かあるしてくれる。このリクガメがいったいどこからきたのかは、さだかではないが、誰かものずきに、どこかから、はるばるはこびこまれてきたことは確からしい。スワヒリ語では、ウミガメはKASA、リクガメは、KOBEとよばれ、ラマザン月にこっそりたべる人もまた、KOBEとよばれるのである。(日野舜也)

施設

電 算 機 室

システム構成図



当研究所では、1978年1月からHITAC M-150システムを導入し、HITAC M-240Dを経て現在 HITAC M-640/20システムが稼動しています。主記憶 32MB、ディスク総容量 15 GB、12インチ光ディスク 4 ドライブ、磁気テープ 3 デッキ、3.5" フロッピーディスク 2 ドライブがあります。入力にはパンチ/マークカードリーダーがあります。出力のためには連続紙漢字プリンタの他にカット紙漢字プリンタが2台あります。これを使用して、大きさも形も様々な A A 諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されていて、国内外の研究者に利用されています。T S S 端末は、電算機室には18台ですが、研究室等にも設置されています。2,400BPSの通信回線には4台のパーソナルコンピュータが接続されています。また、1,200BPSの構内電話回線が2本あります。

ソフトウェアとしては、単語の用例検索システムが準備されています。これは A A 諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままを入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

オフラインの装置には、パーソナルコンピュータの他に、画像データ収録システムがあり、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に利用されています。また、1987年度から導入した光ディスクファイルシステムが2台あり、印刷された大量の資料を登録して、随時必要なページを参照できるようになっています。さらに、1988年度に OCR を導入し、ローマ字系テキストについては、短期間に大量のデータ入力を行うことができます。

図 書 室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入し、また海外研究機関との図書交換を通じて190誌の定期刊行物、研究書・論文集等を収集しています。図書室の蔵書総冊数は1990年3月末現在で約65,500冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌(約1,600種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の文芸雑誌のバックナンバーを多数そろえており、又トルコ官報(オスマン帝国及び共和国)が1831年以降ほぼ完全にそろっているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またヤンゴン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料(1,950冊)をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。また研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

①. 山本文庫(1967年受入)

著名な満洲語学者であった故山本謙吾元跡見学園短期大学教授(1920~65)の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献(和書・洋書合計598冊)が含まれる。

②. 浅井文庫(1970年受入)

これは、AA研の元運営委員でありかつ著名なアウストロネシア言語学者であった故浅井恵倫博士(1895~1969)の戦後集められたアジア・アフリカ諸言語の研究書・辞書類(和書・洋書合計191冊、文書18葉)を始め、同博士が台湾より持ち帰られた高砂族に関する貴重な言語資料(図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等)が含まれている。この写真類の中には、世界的に貴重なキリシタン資料「スピリツアル修行(Spiritual Xuguio)」の原本を写した35ミリフィルムが含まれているが、研究者の便宜を考え現在その複製フィルムは国文学研究資料館に置かれてある。「スピリツアル修行」の原本は、長崎とマドリードに1冊ずつ、世界に僅か2冊しか現存しないという稀覯本であるが、戦前には実はもう1冊マニラにあって、俗に「マニラ本」と呼ばれていた。しかしこの「マニラ本」は戦禍により焼失してしまい、浅井博士の撮られた写真を通してしか今はその原形を知り得なくなっている。

③. 小林文庫(1976年受入)

著名な蒙古史の研究者である小林高四郎元横浜国立大学教授(1905~87)の個人蔵書で、蒙古民族の生活と習俗に関する文献(和書、洋書合計1,671冊)が含まれている。

④. 前嶋文庫(1986年受入)

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である前嶋信次元慶応大学教授(1903~83)の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記など広範な分野にわたる貴重なコレクションである。戦前に刊行され、今では珍しくなった図書も少なくない。

音声学実験室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれの様々な音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を定まった規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしたがって各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターと共に用いられています。フォトコーダーは、極めて詳細な音声データの観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

附属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。



出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、*印のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos.*1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), *20(1980), *21(1981), *22(1981), *23(1982), 24(1982), *25(1983), *26(1983), *27(1984), 28(1984), 29(1985), *30(1985), 31(1986), 32(1986), 33(1987), 34(1987), 35(1988), 36(1988), 37(1989), 38(1990).
 アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~68, (1966~1990).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ビア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- *6. NAGATA, Y., *Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
- *7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasulid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1977.
9. McFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux(Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1980.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造と其の変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. McFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920-1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners—Methods and Media—*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux(Burkina-Faso)*, 1985.
- *19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya'nın cin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası*, (1952~1978).
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tone Alternations in South China*, 1988.
23. ENRIQUEZ, V. G., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.
24. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 下冊, 1990.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|--|--|
| 1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969. | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | 13. 藪 司郎, アツイ語基礎語彙集, 1982. |
| *3. 橋本 萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984. |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974. | 16. 梶 茂樹, <i>Lexique Tembo I: Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais-Français</i> , 1986. |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. | 17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987. |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. | 18. 橋本 萬太郎, 納西語料, 1988. |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. | 19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989. |
| 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Āryan Languages</i> , 1979. | 20. 新谷忠彦, 楊昭, ムン語語彙集, 1990. |
| 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979. | 21. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典A~C, 1990. |
| 11. 橋本 萬太郎, ベエ語語彙集, 1980. | |

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).
 - *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
 - *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
 - *4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).
 - *5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
 - *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
 - *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
 - *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
 - *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
 - *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
 - *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
 - *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
 - 13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1987).
 - 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
 - *15. ビルマ語, 藪 司郎編, 全3冊(1979).
 - *16. ネパール語, 石井 博ほか編, 全3冊(1980).
 - *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
 - *18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
 - 19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
 - *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
 - 21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).
 - *22. アラビア語, 中野暁雄, サブーフ・アル・アラビー編, 全2冊(1982).
 - 23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
 - *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
 - *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
 - 26. バンジャープ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
 - *27. ビリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
 - 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
 - 29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
 - 30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
 - 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
 - 32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).
 - 33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
 - 34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
 - 35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
 - 36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
 - 37. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).
 - 38. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
 - 39. インドネシア語, 森村 蕃ほか編, 全3冊(1988).
 - 40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).
 - 41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).
 - 42. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1989).
 - 43. ベトナム語, 栗原浩英ほか編, 全2冊(1989).
 - 44. アラビア語(エジプト方言), 藤井章吾ほか編, 全2冊(1989).
- 資料1. スワヒリ語<三日坊主コース>テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hP' ags-pa Chinese*, 1978.
- 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
- *3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
- 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.
- 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
- 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
- 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語1, 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語1, 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語1, 1978.
- *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語2, 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語2, 1979.
- *78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語1, 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語1, 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集1: 「の」日本語-AA諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語2, 1980.
- *79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語2, 1979.
- 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語2, 1980.
- *79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), 5(1972), *6(1973),
アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究報告 7(1982), 8-9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
- *5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), *2(1972), *3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. *1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978),
8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987), 17(1988),
18(1989).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:

No.*11. Korean (梅田博之), 1973. 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan (石垣幸夫), 1980. 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. 14c. Thai (森 幹男), 1975, 1984. *15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975, 1983. *16b. Samoan (小田真弘), 1977.	*17. Persian (上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi (縄田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani (縄田鉄男), 1984. 17p. Parachi (縄田鉄男), 1983. 17s. Shughni (縄田鉄男), 1980. *20. African (石垣幸雄), 1975. *21. Swahili (守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. *23. Hausa (松下周二), 1974. *26. Fulfulde (江口一久), 1974. 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. *36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.
--	---
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), *2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, *1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解単語索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14 (藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), *17(傅愁勤, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上冊〉, 1981), *18(徐琳・木玉璋, 傣族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), *21(1983), *22(1984), 23(傅愁勤, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下冊〉, 1984), 24(1985), 25(ポール.K.ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ——日の神の民の起源, 1985), 26(1986), *27(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究, 1986), 28(1987), *29(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究〈続〉, 1988), 30(1988).
- *11. *Oceanic Studies*, No.1(1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 *1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985), 7(1987), 8(1987).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987).

15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos.1(飯島 茂, 日本からみた “*Thailand: A Loosely Structured Social System*”, 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol.1 Nos.1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol.3, No.1(*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No.1(BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No.2(AWASTHI, Suresh, *Drama: The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No.3(NAGASHIMA, Y.S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No.4(AND, METIN, *Culture, Performance and Communication in Turkey*, 1987), No.5(OCHIAI, K. *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*, 1989).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No.1(*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No.2(アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No.1(高知尾仁, 球体遊戯, 1986), No.2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, No.1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), No.2(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), No.3(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions, Part two (Appendix III)*, 1989).
22. 第三世界の大量文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究: マレーシア社会論集, 1(1988).
24. *A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies: Monograph Series*, No.1 (FUJIMOTO, Helen, *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988).
25. AA研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989).
26. イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——, 1(1989).
27. 辞典編纂, 1(1989), 2(1990).
28. 言語文化接触に関する研究, 1(1989), 2(侯精一, 晋語平遥方言分類語彙).
29. *Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project*, 1(1990).

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic—An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.
4. 馬 真 他, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀 巍, 漢語方言文稿集, 1987.
7. 李 榮, 渡江書十五音, 1987.
8. 侯精一, 晋語研究, 1989.
9. 照那斯图, 八思巴字和蒙古語文獻 I 研究論文集, 1990.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogère de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Rahîm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study—* 1977.
8. M. Salah Ahmed, HONDA G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K. & YAMADA, M., *Lāri Basic Vocabulary—Lārestāni Studies 1—*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic—*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Ḥasan Tāj al-Dīn (D. 1139 A.H./1727 A. D.)*, Vol. 1 (Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1)—Texts in Egyptian Arabic [1]—*, 1982.
19. BELLAKHDAR, J., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi İle Tarihi Yaşatma Denemesi—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Ḥasan Tāj al-Dīn*, Vol. 2, *Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographical Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region: A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. BAŞER, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. USMANGHANI, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A., *Comparative Basic Vocabulary of Khonji and Lari—Lārestāni Studies 2—*, 1986.
31. 家島彦一, *Arwād島——シリア海岸の海上文化——*, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabi's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASHI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia—Bolu Dialect Materials—*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation—*, 1988.
36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市——1986年度予備調査報告——, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.
38. HAKAMI, N.F., *Pèlerinage de L'Emām Rezâ*, 1989.
39. HONDA, G., MIKI, W. & SAITO, M., *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*, 1990.
40. OHTA, K., *The History of Aleppo—Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shihna—*, 1990.

African Languages and Ethnography

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Fèrôde du Diamaré: Maroua et Pètté*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G//wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulôe du Plateau de l'Adamaoua au XIX^e Siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue – Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum – with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des archives coloniales allemandes du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e Siècle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili tel qu'il se Parle au Zaïre*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions d'Origine des Peuples du Centre et de l'Ouest du Cameroun*, 1986.
21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
22. MOHAMMADOU, E., *Lamidats du Diamare et du Mayo-Louti au XIX^e Siècle*, 1988.
23. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central*, 1990.

Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.
6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Language*, 1989.

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.

Boucle Du Niger

1. KAWADA, J., 1988.
2. KAWADA, J., 1990.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P.P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M., & NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*. II. 1984.
13. KARAN, P.P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language; A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y., & HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.
SHARMA, P.R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T.-S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Šceme Xrra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P.P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINOO, S., *Die Cāturmāsya Oder die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmanas und der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUWA, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.
20. FINCHER, J.H., *Chinese Democracy—Statist Reform, The Self-Government Movement and Republican Revolution*, 1989.
21. SEKINE, Y., *Theories of Pollution—Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, 1989.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容——アバドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., NARA, T., *Socio-Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H. 1983), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H. 1983), No. 3 (KOMOGUCHI, Y. 1984).

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T., & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S., & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.
5. CHOWDHURI, S., 1987.
6. TANIGUCHI, S., 1987.
7. SATOH, T., & UMITSU, M., 1987.
8. FAROUK, A., 1987.

South Asian Monograph

1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society C 1885-1940*. Vol. 1 (1986), Vol. 2 (1987).
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean, Vol. 2*, 1987.

一般研究出版物

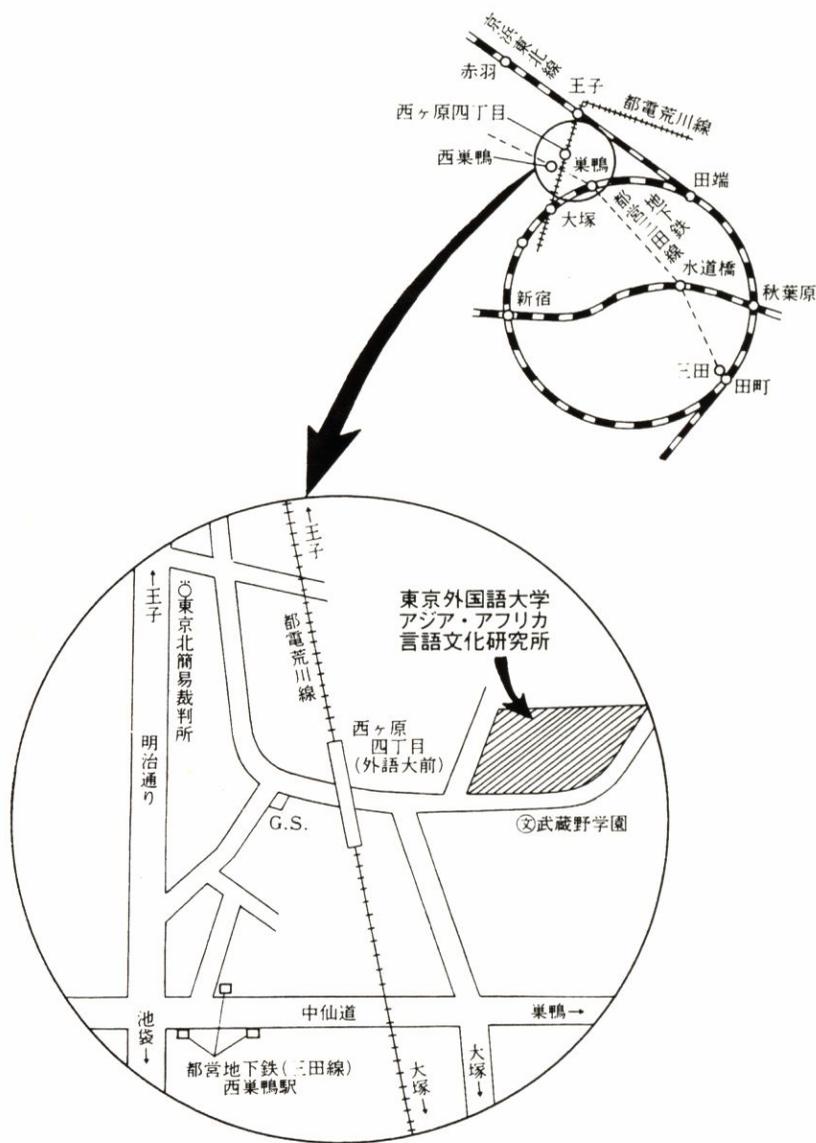
- 湯川 恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
 2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
 3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985)[廃版].
 5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985)[廃版].
 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
 7. TEDIT (フルスクリーンテキストエディタ) 今井健二 (1990).
- 別冊 1. 文字フォントリスト 1 (1989).
- 別冊 2. 文字フォントリスト 2 (1988).
- 別冊 3. 文字フォントリスト 3 (1990).

アジア・アフリカ言語データ シリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文-KWIC索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series-Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series-Bengali Language (2)*, 1989.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Series-Khmer (2)*, 1989.



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111 (代)

FAX 03-910-0613

J R大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原四丁目
(外語大前) から徒歩5分

地下鉄・都営三田線西巣鴨下車10分